

Luncheon Linguistics, 16 December, 2020

2020（令和2）年12月16日

「チュヴァシ語の名詞化接辞の節名詞化機能について」

発表者：菱山湧人（東京外国語大学大学院博士後期課程）

チュヴァシ語（チュルク諸語オグル語群）の名詞化接辞 *-i-ě*（三人称所有接辞と同形だが、ほとんどの場合 *-i* の異形態が用いられる）は、名詞句を形成する機能（例：*pisäkk-i* [大きい-NMLZ] 「（それらのうち）大きい」）だけでなく、名詞節を形成する機能（例：*anne čirle-n-i* [母 病気する-PTCP.PST-CNMLZ] 「母が病気になったこと」）も持つ。

Luutonen (2011) は、*-i* に従属節を形成する機能があるとし、これを統語的名詞化接辞 (syntactic nominalizer) であるとしている。Pavlov (2014) は、名詞や形容詞の文法カテゴリーとして区別カテゴリー (категория выделения) を立て、区別接辞 *-i* に従属節を形成する機能もあるとしている。しかし、筆者の観察では、稀だが *-ě* の異形態も現れうる。さらに、この接辞の分布（どのような述部要素に付くか）については詳細に記述されていない。

本発表では、節名詞化の *-i-ě* の分布を明らかにすることを目的とし、調査を行った。調査の結果、*-i-ě* が直接付くことによる節名詞化は、述部が動詞である場合に最も一般的で、名詞である場合は一般的ではないことが明らかとなった。このことから本稿では、*-i-ě* が直接付くことによる節名詞化は、述部要素の述語性が高いほど一般的であることを主張する。